

尾道商業会議所記念館 第26回企画展示解説

2015年1月30日～2015年5月27日

テーマ 尾道あ・ら・かると ～しまなみ企業家列伝～

中世の時代から商港都としての歴史を刻む尾道は、古くから商人が活躍してきた町であり、とりわけ江戸時代後半から近代にかけては、豪商と呼ばれる大商人も多く登場しました。そうした商業盛んな商人の町としての風土は、また一方で、尾道から大きく世に羽ばたく企業家（会社の経営者）を多く輩出しています。

若くして大阪へ出て丁稚奉公に励み、独立起業後は水道送水管の製造に独力で挑戦し、研究努力の末に国産化に成功、後に農業・工作機械で有名な「クボタ」創業者となる久保田権四郎（因島出身。尾道市名誉市民）…

教師から一転して久保田権四郎の下で働き、権四郎同様の研究熱心さでメキメキと頭角を現し、見込まれて久保田鉄工所（現クボタ）3代目社長に就任、クボタ中興の祖と仰がれると共に、大阪商工会議所会頭として地域経済にもその手腕を発揮した小田原大造（向東出身）…

小さな鉄工所で人一倍汗を流し、当時は目新しい酸素溶接という新技術を習得せんと大阪へ出、へこたれない不屈の精神と並々ならぬ努力でこれを習得、工場創業後も熱心に研究を続け、新製法を發明して2つの特許、3つの実用新案を獲得した耕三寺耕三（後に瀬戸田に耕三寺を開いた。尾道市名誉市民）…

本展において、久保田権四郎、小田原大造、耕三寺耕三の3名を採り上げ、尾道出身、或いは尾道にゆかりある先人企業家の生涯と業績を紹介しながら、企業家（起業家）精神（アントレプレナーシップ）の高揚を促すと共に、その高い志とチャレンジ精神、創意工夫、努力と困難を克服する勇気と英知を、とりわけ児童・生徒の皆さんに学びとって頂きたいと思えます。



久保田 権四郎
(くぼた ごんしろう)

1870(明治3)年-1959(昭和34)年
株式会社クボタ(大阪市)創業者
尾道市名誉市民
尾道市因島大浜町出身



小田原 大造
(おだわら だいぞう)

1892(明治25)年-1971(昭和46)年
株式会社クボタ(大阪市)第3代社長
尾道市向東町出身



耕三寺 耕三
(こうさんじ こうぞう)

1891(明治24)年-1970(昭和45)年
尾道市名誉市民
尾道市瀬戸田町ゆかりの人物

發明企業家 ～久保田権四郎～

農業機械・鉄管などで有名な企業「クボタ」(本社・大阪市)創業の父が、因島大浜に生まれた久保田権四郎(旧姓・大出)です。

権四郎は子どもの時分より起業家精神に満ち溢れ、瀬戸内海を行き交う蒸気船を眺めては、いつかは自分の手であんな船を作り出したいと思っていました。

貧しい農家で苦勞していた両親を楽にしてやりたいと、15歳で大阪へ丁稚奉公に出ました。そこで真面目に根気強く働き、その間にコツコツと貯めた資金を元手に、19歳で秤の分銅などを製造する「大出鑄物」(後、大出鑄造所)を創業しました(店は大阪市南区、現在の中央区)。

1897(明治30)年、それまで国内では技術力が足らず、外国製の輸入に頼るしかなかった水道送水の鑄鉄管(合わせ目のない大型の直管の水道管)の製造研究に、権四郎は独力で挑みました。研究に研究を重ね、何としてもこの手でやり遂げるという熱意と努力が実り、遂に立込丸吹鑄造法を發明し、水道送水管の初の国産化に成功したのでした[3年後の1900(明治33)年に実用化]。

やがて、外国産に負けない鑄鉄管が大量生産されるようになり、大阪、東京の水道管・ガス管として広く普及していきました。それによって会社が大きく成長していく中、取引先であった久保田藤四郎氏から望まれて養子になり、以後、「久保田鉄工所」(現在の株式会社クボタの前身)に社名が改められました。

鑄鉄管から事業は更に拡大して、農業機械、工作機械などの製造も手掛け、満州久保田鑄鉄管、尼崎製鉄などのグループ会社を擁し、従業員2,000人規模の大企業へと成長していきました。

1919(大正8)年には、実用自動車製造株式会社を設立して自動車製造にも進出しますが、こちらは思うような成果を上げるまでには至りませんでした。ちなみにこの実用自動車製造と合資会社ダット自動車商会の合併によって設立された「ダット自動車製造株式会社」は、現在の日産自動車の母体となりました。

権四郎は実業家であると同時に發明家でもあり、70件の特許、実用新案は150余も獲得していました。子どもの頃、故郷の因島で蒸気船を眺めながら、いつかは自分の手で…という熱い思いを抱いていた権四郎の、たゆまないチャレンジ精神には見習うべきものがあります。

そんな自分を育ててくれた故郷因島に対して、山口玄洞に同じく故郷孝行を権四郎もしています。

本拠地である大阪においては、貧しい子ども達の為に設立された私立徳風尋常小学校を支援し続け、因島においては、出身地である大浜町から、中庄町、重井町を中心に、学校の建設や道路の整備といった公共事業に私財を投げうっています。

そういった権四郎の功績を讃える記念碑が島内に数々見られ、2003(平成15)年には、因島の名誉市民に選定され、合併後は尾道市名誉市民に引き継がれています。

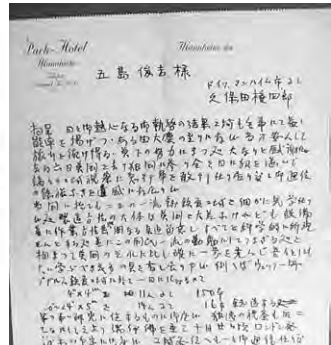
【関連資料(株式会社クボタ資料提供)】



久保田権四郎発行の領収書

1903 (明治38)年に大阪瓦斯 (現・大阪ガス)に納入したガス用鉄管の領収書です。

水道用として利用されていた鉄管は1904 (明治37)年には、ガス管にも再作用されるようになりました。同社の取締役技師長から「輸入品に優るとも劣らず」と称賞を得て、大量の注文を受けることになりました。

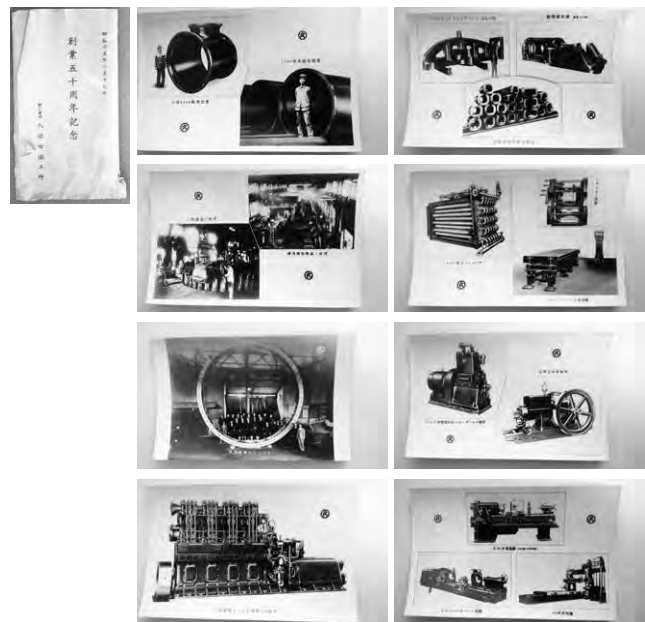


久保田権四郎からの手紙

1927(昭和2)年に久保田権四郎がドイツの鉄管メーカーを視察した際に、その技術や職員の仕事ぶりに感銘を受け、尼崎工場の工場長に宛てた手紙です。手紙には、視察した際の感想が綴られています。

(手紙の内容の一部)

「…略…製造方法の大体は英国と大差なれども設備並に作業方法とも些細なる点迄留意しすべてを科学的に所理せんとする処並にこの国民一流の勤勉にしまざる処と相まって英国のそれに比し確に一步を先じ吾々としても大いに学ぶべき幾多の点を有し居りやに例ばウェッラー町ブデルス鉄管工場に於いて一日に10時間にて
4インチ×4mを 11人にて 150本
20～24インチ×5mを 14人にて 16本
鋳造する等の事は研究に値する…略…」



創業50周年を記念して作られた絵葉書 (昭和15年)

創業50周年を迎えた1940 (昭和15)年10月に創業50周年記念式典が挙行されました。絵葉書その他、会社説明用パンフレットや、創業者についての著書「此の人を見よ～久保田権四郎傳」を来賓・従業員その他関係者に贈りました。

この年に70歳を迎えた久保田権四郎はあいさつの中で、『自分の魂を打ち込んだ品物を作り出すこと、又其の品物には正しき意味に於ける商品価値を具現せしむること』と述べました。

久保田権四郎の地元に残る功績

・大浜小学校と記念公園

1875 (明治8)年の開校になる歴史を持ち、1926 (大正15)年に現在地へ移転。久保田権四郎の寄附によって、旧校舎、講堂、敬老館が建てられました。学校統廃合により、2007 (平成19)年3月25日に閉校。敷地内には、遺徳を偲ぶ記念公園があります。



・道路の建設

大浜町と中庄町を結ぶ海岸道路と道路開通記念碑。



・久保田橋

大浜町の海岸道路上に架かる久保田橋も、権四郎の故郷孝行のひとつ。



クボタ中興の祖にして 大阪経済を支えた大物～小田原大造～

トラクターやコンバインといった農業機械から工作機械のメーカーとして名高いクボタ (旧久保田鉄工所、本社・大阪市)、その創業者は因島大浜町出身の久保田権四郎翁ですが (企業家列伝 I で紹介)、その後継 (3代目社長)として会社の経営を担い、クボタ中興の祖と仰がれるのが、向東町出身の小田原大造です。

山陽鉄道 (後の国鉄、現JR山陽本線) 尾道～糸崎間が開通した1892 (明治25)年、向島東村 (現向東町)に生まれた大造氏は生来病弱で、病欠のために小学校を一年留年、進学した尾道商業高校でも同様でした。

これによって進学を断念した大造氏は、漢学者だった父親の後に続いて教員を目指し、自主的・積極的に勉強を積み重ね、22歳の時に文部省の検定試験に合格、晴れて中学校の教師となりました。

3年半ほど教員生活を送った後、大造氏は自分の進むべき路を教壇から企業へと、大きく舵を切り替えます。1916 (大正5)年、

兵庫県尼崎市にあった関西鉄工へ入社した大造氏は、教員から一転して企業人としての路を歩み出す事になったのです。

教員を目指して独力で猛勉強を重ねた大造氏でしたから、その勤勉性はここでも大きく発揮され、仕事に役立つあらゆる書籍を読みあさるなど、必要となる知識・教養を片っぱしから修得していったといいます。

翌1917（大正6）年、関西鉄工は久保田権四郎翁率いる久保田鉄工所（現株式会社クボタ）に買収され、以後、大造氏は久保田鉄工尼崎工場の社員として、権四郎翁の下で働く事となりました。

この時、久保田鉄工から工場の責任者としてやって来たのが因島出身の須山会三氏でした。須山氏は勉強熱心な大造氏に対し、次のように諭します。

「実業界は学校と違って生存競争が激しい所である。事業で成功しようとするれば、実力のある社員を持たねばならない。したがって、会社の経営者は実力ある社員を探している。君もそのつもりで勉強しなさい…」

須山氏の激励を得て、大造氏はより奮起するに至り、勤勉と努力によって蓄えた実力を徐々に現し始めます。

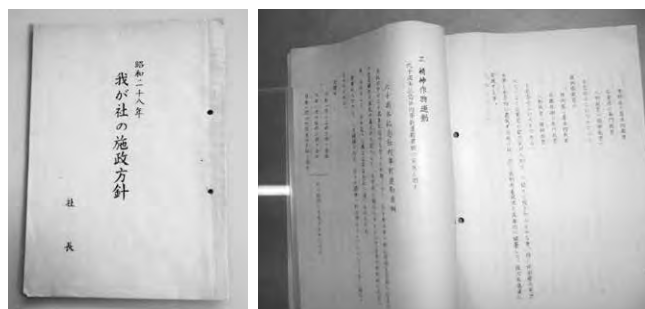
1923（大正12）年、工場で巻き起こった労働争議（会社で働く労働者が待遇改善を求めて行なう行動）に、工場長代理にあった大造氏は先頭に立って交渉にあたり、難局を円満解決へと見事に導くのでした。また、工場の効率化にも力を注ぐなど、やがてその存在は社長である権四郎翁の目にも留まり、1938（昭和13）年、久保田鉄工所の常務取締役（社長、専務に次ぐ職位）、次いで1945（昭和20）年には専務取締役（社長に次ぐ職位）に抜擢され、1950（昭和25）年、遂に久保田鉄工第3代目の社長に就任するに至りました。

小田原社長時代のクボタは、これまでの農業機械・工作機械にとどまらず、建設機械事業、住宅建材事業、水処理・環境事業などにも進出してゆき、会社が更に大きく発展していく礎を築いた人物として、クボタ中興の祖と今も仰がれています。

その力強い経営手腕は会社（クボタ本社）が所在する大阪の街でも発揮され、大阪経済を担う大阪商工会議所第17代会頭として、大阪万博（昭和45年、大阪府吹田市で開催された日本初の万博・日本万国博覧会）の誘致から、大阪国際空港の用地拡張や移転補償などの交渉・調整など、地域経済に多大なる貢献を果たしています。

金光教を信仰していた大造氏は、「神の前では社長も社員も皆平等で、共に幸せにならなければならない」と説き、また、「国のためになる事業をなす会社」を追求し続けました。

【関連資料(株式会社クボタ資料提供)】



小田原社長の経営施策方針の冊子

社長に就任した小田原大造は、1952（昭和27）年から毎年年頭に経営方針を発表した。社是三則「一流の品格 一流の信用 一流の製品」をまとめました。



創業70周年記念パンフレット（昭和35年）
（小田原大造社長のあいさつが掲載される）

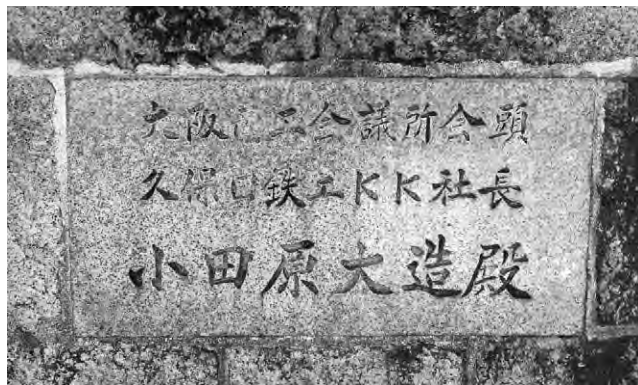
1960（昭和35）年10月1日、創業70周年の式典が前日に完成したばかりの本社新社屋（現クボタ本社第二ビル）で行われました。小田原大造社長は式典の後、創業者・久保田権四郎の墓前で、70周年記念事業の無事終了と会社発展に向けての決意を伝えました。

向東と加島に建つ頌徳碑と顕彰碑



・向東町古江浜地区に建つ頌徳碑

裏面碑文…古江濱才越地域内県道農道改良を始め区内開発事業地元負担金として金二百万円也の御寄贈を賜り郷土の文化向上発展に寄与せられる。
1962（昭和37）年6月1日



・向東町古江浜地区に建つ頌徳碑



・加島に建つ顕彰碑

加島（向東沖の島、現在は無人島）の電気施設寄附に対して建てられた顕彰碑。1961（昭和36）年2月の建立。

不屈のチャレンジ精神～耕三寺耕三～

瀬戸田と言えば、西の日光とも称される耕三寺が名高いものになっていますが、島に輝くこの寺を建てた人物こそ、耕三寺耕三こと本名・金本福松です（のち耕三寺耕三と改姓）。

仏の道を求められた耕三師は、実業家でもありました。その成功が、耕三寺建立へと結実する大きな源となっているのです。

金本家は福岡県直方市において、小さな鉄工所を営んでいました。創業者である父親が若くして亡くなったため、耕三師は学業を諦め、父の遺した鉄工所で働き、一家を支えていかなければなりません。小柄の体ながら、人一倍に汗を流す働き者だったといえます。

1908（明治41）年、酸素溶接の新技术を習得すべく、耕三師は大阪へ向かいました。そこで一度は受け入れを断られたものの、何ともしもというその熱意が伝わり、雑役として採用されました。

雑役ながら、工場の休日を利用してこっそり練習に練習を重ねるなど、並々ならぬ努力が認められ、やがて溶接工へと昇格されるのでした。

父の急死から学業断念、人一倍働き一家を支える、そして大阪へ武者修行に旅立つ…この流れは山口玄洞翁（企業家列伝Ⅰで紹介）とも近似しているところです。

主任技師のフランス帰国に際し同道を求められましたが断り、習得した技術を携えて直方へ戻ると、当時としては九州で唯一となるガス溶接の工場を操業します。1913（大正2）年の事でした。

第一次大戦下の好況も追い風となって、100人を超す従業員を抱える大工場へと発展して行きました。

耕三師の研究熱心はその後も変わらず、習得した溶接技術に更なる改良の手を加えて、これまた当時としては画期的な6インチ以上の径大鋼管の製法を発明するに至りました。

しかしそんな順風満帆は長くは続きませんでした。大戦後の世界的な大恐慌によって、耕三師の汗の結晶ともいえる工場は倒産してしまいます。

振り出しに戻された耕三師は、出発点となった大阪へ立ち戻り、再びゼロからのスタートに向けて動き出します。

かつての工場取引のあった大阪鋼管商店の支配人と、日本特殊鋼管合資会社を設立（資本金2万5千円）、初年度から3万数千円の利益を上げるのでした。

1926（昭和元）年、経営方針を巡って意見が合わなくなった事から、耕三師は同社を離れると、新会社として東洋径大鋼管製造所を創業します。これまで培ってきた、2つの特許と3つの実用新案を含む技術力をいかに発揮し、受注も相次いで生産量はうなぎ登りでした。

そんな発明実業家として成功を掴み取った耕三師が、仏の世界へ心を寄せた契機は、最愛の母の死でした。

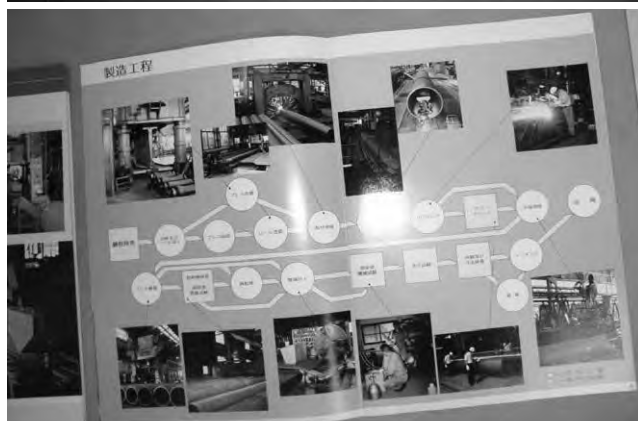
母の故郷の瀬戸田に母親の菩提を弔うための寺を建立しようと思い、京都・西本願寺で得度して僧侶となりました。まず山梨の得祐寺の住職になり得祐寺を瀬戸田に登記上移転し、その寺号を耕三寺に変更するという手続を踏み、建立にかかりました。そこに失業者救済と郷土の発展を願う時の山本五次町長を始めとする周囲の要請・後押しが加わり、飛鳥時代から江戸時代までの代表的な寺院建築を採り入れた、壮大豪華なる耕三寺が建立されたのでした。

建築作業には、夏休み中の地元児童たちも多数参加し、奉仕の汗を流したというエピソードも伝えています。

とかくその豪華さばかりに目が奪われがちな耕三寺ですが、「世の中のお母さんに感謝するお寺（場所）にしたい…」（『耕三寺夜話』より）というのが、耕三師がこの寺に込めた思いなのでした。



耕三寺本堂



(株)径大鋼管製造所の会社案内
※耕三寺博物館所蔵

当製造所の径大式電気溶接機は、溶接部を焼鈍（金属・ガラスをある温度に加熱したのち、ゆっくりと冷却すること）することにより、特に衝撃力に対する性質を改善したものであった。

その品質の高さから、主要納入先として、(株)住友金属工業、日立造船(株)、川崎重工業(株)、三菱レイヨン(株)など錚々たる大企業が名を連ねている。